

なった。この発表会では56名の学生が発表を行ったが、コロナ禍の状況にもかかわらず、確たる自分の信念を持ちながら、1年間地道にかつ丁寧に課題に取り組み、優れた成果をあげたものも見られた。

新型コロナウイルス感染症は災厄であるが、それによって、学生・教員は、少なくとも1年前に比べて、オンライン会議・授業のスキルを相当にアップさせている。この困難な状況が、人の成長や社会・組織の発展のチャンスであると捉えたい。

生物資源管理学科のこの一年

原田 英美子

生物資源管理学科長

2020年度、生物資源管理学科では、4月に住田卓也先生が講師として着任され、教員18名のメンバーでスタートを切った。住田先生は植物病理学がご専門で、植物病原糸状菌を中心として、微生物農薬の開発、病原菌の感染制御メカニズムの解明等の研究を行っている。入学者62名を迎え、平穏に新学期を迎えた。・・・となるはずであったが、実際には、2019年末から拡大したCOVID-19パンデミックの対応に追われて右往左往しているうちに、あっという間に1年が経過したというのが正直なところである。

この原稿を書くために本年度の記録を改めて確認していたところ、4月1日の学科長着任の挨拶として学科教員に送ったメールに「4月19日までは大学に来ないように、学部生・大学院生に周知徹底をお願いします」と書かれており、当時の緊迫した雰囲気を感じ出した。「4月6日の臨時学科会議の予備メール会議」の記録では、「4月20、21日に実施するオリエンテーションの内容は予定通りでいいか」「動植物管理のために学生を登校させる際の基準は?」「現段階で不明な点、事務局への問い合わせ項目のとりまとめ」などが協議されていた。本学科の教員が、研究室の学生の状況を熟考し、場合によっては他大学から情報収集し、この困難な中でど

のように研究・教育活動を行うかを真剣に考えて議論してきたことの貴重な記録ではないかと思った。入学式の式典中止、オリエンテーションの中止、それに引き続いて前期授業開始が延期となることを受け、学科では学生へ学科ホームページ等を用いて情報発信を行った。学科教員の寄せ書きを急ぎよ準備、4月15日付で配信した。インターネット環境に関する学科アンケートも4月20日の段階でとりまとめた。

教員間で情報交換すべきことは多いが、県外から公共交通機関で通勤している教員も少なくない中、会議のために一つの部屋に集まること自体がクラスター発生のきっかけとなることが危惧された。4月定例学科会議は、来学可能な者は対面での会議に出席、参加できない者はメール参加とした。5月以降は、入試関連など、オンラインでは資料の共有が難しい議題などについてまず対面で審議、そのあと各自の研究室に戻ってZoom（7月まで）もしくはMicrosoft Teams（9月以降）に移行して遠隔で会議を継続するという「時間差ハイブリッド」形式により学科会議を実施していた。

5月11日に前期講義が遠隔で開始したが、その直後の学生からのレスポンスは「体育や実験実習などが遠隔の座学で終わってしまい悲しい」「やりがいを感じられない」「パソコンの画面を見すぎて目が痛い」など、読んでいる教員の側も辛くなるような内容であった。課題のやりとりの際の通信トラブルなども頻発しており、遠隔講義のトラブルシューティングで悪戦苦闘の日々であった。

このように、波乱の中で進行していった2020年度であったが、夏が近づくにつれて遠隔講義のノウハウも徐々に蓄積、集中式の対面の実習が始まり、後期は制限があるものの、とにかく対面式の講義・実習を行うことができた。本学科は、環境科学部で一学年当たりの人数が最も多いこともあり、三密回避対策に特に配慮することが必要であった。年明けからは再度状況が悪化して遠隔に逆戻りとなった。

卒論発表会は、Microsoft Teamsを用い、3つの「部屋」で同時進行する形で実施した。実質

半年程度の研究活動でも、研究計画がきちんと立てられていればまとまった成果が上げられること、また、遠隔でも卒業研究を十分プレゼンテーションできるという感触を持った。一方、音声流れなかったり、パワーポイントの画面が固まったり、録画のスタートボタンの押し忘れなど小さな運営上のトラブルは時々起こっていた。あたふたする教員を尻目に、座長を務める大学院生が冷静に対処していたのが印象的であった。

3月20日には学位記交付式を交流センターで実施し、72名の卒業生を送り出した。卒業生では、東出真帆さん（成績優秀者）、中澤利恵さん（日本農芸化学会での発表がトピックス演題に選定）、徳田龍司くん（湖風会学生表彰、ウィンドサーフィン部の活動で模範的な成果）の3名が学生表彰を受けた。東出さんは、謝辞総代者として、自ら作文した謝辞を廣川能嗣学長に届ける役割を果たした。また、3回生の中森麻由さんと船原瑞穂さんが代表・副代表を務める近江楽座ボランティアサークルHarmonyが、「障害者の生涯学習支援活動」に係る文部科学大臣表彰を受賞した。

研究活動には制限のある条件下であったが、上町達也准教授らの共同研究グループが、伊豆諸島の青ヶ島に由来するガクアジサイのゲノムの解読(<https://www.usp.ac.jp/topics2/hydrangea/>)、杉浦省三教授が、「魚食文化復活の鍵を握る『骨なし魚』の養殖」で第5回滋賀テックグランプリ最終選考会パートナー企業賞を受賞(<https://www.usp.ac.jp/topics2/x201/>)という成果を上げられ、大学ホームページのNews&Topicsに掲載された。

このほかの特記事項としては、特別選抜の推薦入試 Aでは本年度の入試から総合問題の出題をやめて共通テストを導入したことが上げられる。志望動向にどのように影響するのか今後注視する必要がある。3年次編入学試験も実施し、1名が合格した。

2月には、卒論・修論・博論の著者名と論文タイトルを公開するかどうかで学部内で議論があった。ひとまず今年度は、学生に同意書を作

成させたうえで、環境科学部年報に氏名と題目を掲載することになった。仮に論文タイトルが全面的に不開示になった場合、研究活動を対外的に示すものとして、学会発表や投稿論文の記録がこれまでより重要となる。学部・学科の運営にも大きく影響を与えられとされる。本学での学びにより成し遂げた卒業研究が、「公開されると本人に不利益を及ぼす個人情報」とならず、学生たちが誇りを持って本学を巣立てるように、教員としても一層の努力が必要だと感じた。

最後に、この一年間、学科の先生方のご支援に感謝するとともに、少しでも早く事態が収束し、研究・教育活動が以前の通り実施できることを願って筆をおきたい。

環境動態学専攻のこの一年

丸尾 雅啓
環境動態学専攻長

2020年度の在学学生は博士前期課程29名、後期課程11名であった。博士前期課程を7名が修了、博士後期課程では9月に銭軍氏が学位論文“Techniques for mass-culturing microalgae using anaerobic digestion effluent from over-growing and invasive aquatic macrophytes”により博士号（環境科学）を取得した（詳細は本年報の抄録をお読みください）。またうれしいことに日本学術振興会特別研究員(DC1)として久岡知輝君が、昨年度の森井清仁君に続いて新たに採用された。

大学院生の活躍としては、西平幸生君（2019年3月修了）の研究によってコイに寄生するフタゴムシとフナ類に寄生するものが別種であることが突き止められ、その形態や遺伝的な違いが明らかにされた。このうちコイに寄生するものを*Eudiplozoon kamegaii* Nishihira et Urabe, 2020（和名：コイフタゴムシ）と命名し、滋賀県草津市を模式産地として新種記載、今年度に査読付論文として掲載された。

教員の研究としては上町達也准教授の所属する共同研究グループが、伊豆諸島の青ヶ島に由